

いの流水俳壇

松尾 満津於 選

「当季雑詠」

書き下す筆のすべりや水温む

刈谷 志津

(評)寒さの中に身をこわばらせながらも、漸く緩んだ窓辺の机に向って腰を下して、周辺を見渡しているのである。水の色も空気のかげやきも何時からともなく、春の季節となっている。書き下す筆の運びもよくなったのは、冬の寒さから解放された手足の、動きのよさであり、自然の息吹き、やつと遠くから届いたやすらぎであろう、その水の流れ、濁り、動き方など何時からともなく温まって来た感じがする。

いくたびか覚めてもひとり春立つも

間 浩太

(評)節分の翌日が「立春」であるが、この句は「春立つも」であり、立春とは意味を異にする、昔は立春が新年で元日のことを「今朝の春」といった。この句の「春立つも」の内容は、まことに意味深長で、忘

れられない夫婦の絆の強さが示されている。この句と抱き合わせて発表された句に「連れ添って五十五年の朧かな」があり、セットになっているように見受けられる。惜別の情が直に伝わり他人事とは思えない、身につまされた思いがする。

廢屋の庭にひっそり福寿草

筒井 正子

(評)福寿草は元日に必ず咲くといひ、元日の華の名がある。小さいが、ふくよかで豊かな感じがする菊のような黄色い花で、朝に開き夕に閉じるという。廢屋の庭に、つつましやかに、ひっそりと咲いて「福寿草よあなたは、それでも幸せなの？」と声をかけてやりたいような衝動の中で生まれた句。

数打って当らぬ籤や山笑う

片岡 包女

(評)当人の意志が直接反映しないようにして、仏意や神意を問いかけたり、勝敗、当落、順番などを決める方法が「くじ」であるところから、その限度は果しなく、確率は途方もなく低い。季節は春、気持はおおらかにすることだ。春山は笑うが如く、夏山は滴る如く、秋は粧ふが如く、冬は眠るが如しである。

着膨れて老女どっかと市仕切る 岡本とも子

過疎となる歴史見据えし寒椿 大川 節弥

脱藩の道を伝えて冬苺 友草 水月

日脚伸ぶ振子の時計音刻む 井上 郁子

春の芽や過疎の暮しの色となる 竹崎 光子

朝戸繰る静かな春の雨なりし 川村 博子

日脚伸ぶ夕刊配る異邦人 津田 久美

鬼は外軽く握りし豆の数 森岡 照月

節分やゆっくり掃きて小鳥よぶ 弘瀬うき子

夢二展水仙すくくと活けてあり 伊藤 萩甫

紅梅のしづくしだれて落ちる紅楠目 哲郎

学園の傍捨てられし子猫じゃれ竹崎たかひろ

爆音を引きて春空真平 松尾満津於

次 題 「当季雑詠」

締め切り 毎月第2月曜日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133



使われていない農地やハウスの情報提供のお願い

高知県農業公社では、使われていない農地やハウスなどを探しています。これらの情報を就農相談会や高知県農業公社のホームページ等で新たに農業を始める方や、農業の規模拡大を考えている方などに提供し、マッチングさせることで耕作されていない農地や遊休ハウスなどの有効活用を図っていきたく

と考えています。

売ったり、貸したりできる農地やハウスなどがございましたら下記まで情報をお寄せください。

▶ 問い合わせ

(財)高知県農業公社 ☎ 823-8618 ☎ 824-8593
産業経済課 ☎ 893-1115 ☎ 893-1440